

1. 住宅の計画理論では家事労働の合理化に対応し全体の平面構成がなされるべきであるがその間の具体的研究は殆んど見られない。本論文 I では家事労働の性格を論じ主婦の家事労働にたいする主観と台所形式についての指向を明らかにし、終日の主婦の追跡よりその生活実態を分析した*。本論文 II では家事労働面から住宅平面のパターン分けをおこない、パターン別に主婦の動きを集計し、家事労働を含む主婦の行動が住宅の平面構成に支配されることを具体的に示したい。

2. 住居学科の学生の母親を対象とし、終日の典型的と考えられる生活追跡例17件をとり、各住宅別に円周上に各室および戸外の位置をとり、各室の在室時間の総和および各室間の往来の頻度を図式化して整理した。これを住宅平面のパターン別に集計して検討した。

3. 独立食事室型では室間往来の頻度が大になるが居間の定着性が高い。ダイニング・リビング型では台所との頻度が最大になるが、その一種であるお茶の間型では定着性が低くなる。ダイニング・キッチン型では他室への往来は最も少なくなり家事労働は最も軽減されるが、居間が客間的に使われる傾向があり居間の定着性が甚だ低くなる。すなわち質の悪いリビング・キッチンとしての使用がなされている。以上より住宅の平面構成が家事労働のみならず住生活を規制することを実証できる。

* 著者：家事労働と住宅平面構成の関連 I, 第30回本学会関西支部研究発表会, S. 43, 5.